

## 2019年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	<b>情緒応答性評価による母子相互作用の強みと脆弱性領域の把握</b> －自閉スペクトラム症の幼児とその母親の様相－
キーワード	①情緒応答性、②母子相互作用、③自閉スペクトラム症

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	カネヒラ ノゾミ 金平 希	所属等	福山大学 人間文化学部 講師
プロフィール	福山大学人間科学研究科心理臨床学専攻を修了。2009年に同大学心理学科の助手に着任し、2020年より現職。2018年公認心理師試験合格。その他、臨床発達心理士、保育士などの資格をもつ。大学では障害者・障害児心理学、児童臨床心理学を専門としており、発達障害や発達に特徴を持つ子どもと母親の関係性構築について研究を行っている。また、児童発達支援センターにおいて、知能検査の実施や発達相談業務を行っている。さらに、ゼミ生と共に、地域の発達に特徴を持つ子ども達を対象に、コミュニケーションや学習支援、ソーシャルスキル・トレーニングなどを実施している。		

### 1. 研究の概要

本研究では、自閉スペクトラム症（以下ASD）児とその母親における情緒応答性（Emotional Availability；以下EA）の特徴を明らかにすることを目的とした。参加者は4～6歳のASD児とその母親12組および、4～6歳の定型発達児とその母親12組であった。情緒応答性尺度を用いて母子観察場面でのEAを評価し、ASDと定型発達の母子の結果を比較した。その結果、ASD児の母親は、子どもとの相互作用場面において、子どもが自律的にリードや探索することに干渉しすぎないという「非侵入性」は定型発達児の母親と同様に行っていた。一方で、定型発達児の母親と比べ、子どものサインに敏感に反応する「感性」、子どもの特性に合わせ、効果的に枠組みや決まりを与える「構造化」、攻撃的な情緒を表出しない「非攻撃性」が難しいことが明らかとなった。また、ASD児は定型発達児と比較し、母親へ自ら働きかけていく「関与の促し」が苦手であることが示唆された。さらに、ASD児のこのような「関与の促し」の苦手さには、言語理解や発達状況、ASD児の特性の一つである社会的コミュニケーションの困難さが関係している可能性が示唆された。一方で、母親のEAには、ASD児の言語理解や発達状況よりも問題行動が関係していることが示唆された。このように、本研究から、定型発達の母子と比較したASD児とその母親の母子相互作用における強み（母親の「非侵入性」や子どもの「反応性」）や脆弱性（母親の「感性」、「構造化」、「非攻撃性」や子どもの「関与の促し」）が明らかとなった。今後は、さらにデータを蓄積し、強みを活かし、脆弱性に焦点を当てた介入を行い、その効果を明らかにしていく必要がある。

### 2. 研究の動機、目的

ASD児の母子関係支援について、療育などの現場では、現状の母子相互作用の脆弱性だけでなく（子どもの情緒シグナルの脆弱性等）、強みを客観的に評価することで支援の糸口に繋がるのではないかと期待している。実際、障害児の母親の一部は、障害特性に合わせたポジティブな情緒的相互作用の効果的方略を用いることが報告されている。しかし、国内で母子相互作用を客観的な指標で捉えた研究は少ない。そこで研究者は、欧米をはじめ様々な国で用いられており、強さと脆弱性双方の把握を可能にする母子間の情緒応答性（Emotional Availability）

以下EA)に着目した。

EAとは、情緒的に健康な関係を共有する母子の能力であり、互いに情緒を表現し合い、相手に十分かつ適切に反応しているときに高くなる。これは、情緒応答性尺度 (Emotional Availability Scales: 以下EAS)により、実際の母子相互作用場面の観察から、母子ペアとしてのEAおよび、母子それぞれのEA (母親の「感性」、「構造化」、「非侵入性」、「非攻撃性」、子どもの「反応性」、「関与の促し」)が客観的なデータとして把握できる。例えば、母親から子どもへの情緒的な関わりが高い場合、EAは「感性」や「構造化」の高さで示され、いらいらが高い場合は「非攻撃性」の低さで示される。このように、母子間のEAを把握することで、強さと脆弱性領域の特定が可能となり、調整が必要かどうか、調整が必要であればどのようなやりとりへの介入を行えば良いかの判断が可能となる。

しかし、わが国のEA研究は、定型発達を対象とした数件にとどまっており、昨年度、研究者が国内で初めて発達障害児とその母親を対象に実施した (金平・諏訪 他, 2019)。しかし、サンプル数が少なかつたため、診断種別間でのEAの特徴は検討できていない。そこで、本研究では、幼少期の母子関係性の支援が急務であるASD児とその母親のEAの特徴について把握することを目的とした。

具体的には、発達障害が指摘されはじめる就学前 (4歳~6歳)のASDの幼児とその母親12名における母子相互作用の特徴について検討した。その際、次の①②に焦点を絞った。

- ① ASD児とその母親の相互作用場面の観察からEAを評価し、得られたデータと定型発達のデータを比べ、強さと脆弱性領域を検討した。
- ② ①の結果をもとに、EAの高低に関わると思われる子どもの要因 (子どもの発達状況や問題行動など)との関連性を検討した。

### 3. 研究の結果

#### <研究の経過>

【参加者】 2019年5月に広島県内の療育施設2園を利用している4~6歳の幼児とその母親に研究協力の募集を行った。その結果14組の応募があり、6月~8月にEA評価のため、6つの半構造化場面 (約30分)について (図1)、研究補助と共に母子相互作用をビデオカメラで撮影した (図2)。その結果を、EASの正式な評価トレーニングを受け、評価の信頼性が認められている大阪大学の諏訪講師とともに評価を行った。また同時に、EAの関連要因を検討するため、子どもには、言語状況を調べる検査を実施し、母親には複数の質問紙調査への記入を依頼した。

しかし、本研究に参加した14組のうち、医療機関においてASDの診断を受けている者が2名しかいなかった。そのため、研究者が2017年より毎年同療育施設で実施していたASD児とその母親のEAデータと合わせ、最終的に4~6歳 (平均月齢5.46歳,  $SD=0.77$ )の12名 (男子7名, 女子5名)を分析対象とした。また、ASD児とその母親のEAを比較するため、2018年に研究者が収集した、2つの子ども園の4~6歳 (平均月齢5.11歳,  $SD=0.63$ )の12名 (男子5名, 女子7名)の定型発達児 (これまでに一度も発達の遅れについて指摘されておらず、ASD症状のスクリーニング検査であるSCQのカットオフ値を超えていない)とその母親のデータを用いた。

【調査内容】 母子の相互作用場面の観察を基に、母子のEAを評価するため、①情緒応答性尺度 (Emotional Availability Scales 4th Edition; 以下EAS)を用いた。また、子どもの言語発達状況を調べるため、②Picture Vocabulary Test-Revised (以下RVT-R)を行った。さらに、子どもの特徴を把握するため、母親に③~⑤の3種類の質問紙への回答を依頼した。発達状況を調べるため③Kinder Infant Development Scale 乳幼児発達スケール; TypeT (以下KIDS)、問題行動を調べるため④Child Behavior Checklist / 4-18 日本語版・親用 (以下CBCL)、発達特性を調べるため⑤Checklist for Developmental Disabilities in Young Children 幼児用発達障害チェックリスト (以下CHEDY)。なお、CHEDYについては、ASD児の母親のみに回答を依頼した。

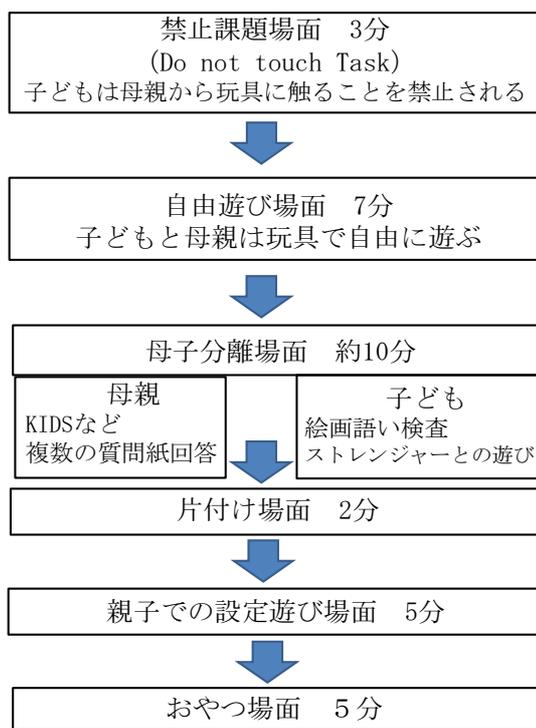


図1 情緒応答性評価の観察場面



図2 母子相互作用の様子为例

## <研究の結果>

【ASD児と定型発達児の言語理解力、発達状況、障害特性の比較】 ASD児と定型発達児のそれぞれ12名で、言語理解力、発達状況、障害特性の平均値に違いがみられるか検討した（*Mann-Whitney*の*U*検定）。その結果、言語理解力（RVT-Rの評価点SS；ASD児7.6，定型発達児12.3）と発達状況（KIDSの総合発達指数DQ；ASD児68.7，定型発達児99.0）は定型発達児が有意に高く、問題行動（CBCLの総合T得点；ASD児66.1，定型発達児54.3）はASD児が有意に高いことが示された。

【ASDと定型発達の母子の情緒応答性の比較】 ASDと定型発達のそれぞれ12組の母子間で、EASの下位尺度（母親の「感性」、「構造化」、「非侵入性」、「非攻撃性」、子どもの「反応性」、「関与の促し」）の平均値に違いがみられるか検討し（*Mann-Whitney*の*U*検定）、表1に示した。その結果、母親の「感性」、「構造化」、「非攻撃性」で有意な差がみられ、いずれもASD児の母親は定型発達児の母親よりも低かった。つまり、ASD児の母親は相互作用の中で、子どもの出すサインに敏感に反応を示したり、その場を効果的に構造化したり、ネガティブな情緒を抑制することが定型発達の母親と比べて難しい可能性がある。しかし、「非侵入性」では差がなく、ASD児の母親も定型発達の母親同様、ASD児が自立的にリードすることや探索することを尊重している可能性がある。一方、子どもの「関与の促し」で有意な差がみられ、ASD児は定型発達児よりも低かった。つまり、ASD児は母親の働きかけに対して反応はできるが、母親に自ら働きかけることは定型発達児と比べて苦手である可能性が示唆された。

【ASD児の要因と情緒応答性との関連】 ASD児の要因（PVT-R、KIDS、CBCL、CHEDY）とEASとの関係を検討した（スピアマンの順位相関係数）。その結果、母親の「構造化」は、CBCLのみと負の相関を示した（ $r=-.76$ ， $p<.01$ ）。これより、母親の構造化には、ASD児の言語理解や発達状況よりも問題行動が関係している可能性が示唆された。一方、ASD児の「関与の促し」は、PVT-R（ $r=-.65$ ， $p<.05$ ）、KIDS（ $r=-.65$ ， $p<.05$ ）、CHEDYの社会的コミュニケーションの困難さ（ $r=-.59$ ， $p<.05$ ）と負の相関を示した。これより、ASD児の言語理解や発達状況が低く、社会的コミュニケーションが困難であるほど、母親に自ら働きかけることが難しい可能性が示唆された。

表1 情緒応答性のASDと定型発達の子の比較

	ASD群 (N=12)	定型発達群 (N=12)	Z値
母子のEA合計	150.33 (11.73)	162.75 (7.43)	-2.83 **
母親のEA合計	100.42 (6.23)	107.58 (6.33)	-2.69 **
子どものEA合計	49.92 (7.37)	55.17 (1.99)	-2.50 *
<hr/>			
<母親のEA>			
敏感性	24.42 (2.23)	26.33 (2.10)	-2.26 *
構造化	25.08 (1.83)	27.33 (1.07)	-3.21 **
非侵入性	24.75 (1.91)	26.33 (2.50)	-1.70
非攻撃性	26.17 (1.80)	27.58 (1.51)	-2.06 *
<hr/>			
<子どものEA>			
反応性	25.42 (3.68)	27.33 (1.72)	-1.89
関与の促し	24.50 (3.87)	27.83 (0.84)	-3.00 **

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$   
( ) 内はSDを示す。

#### 4. 研究者としてのこれからの展望

本研究では、ASD児とその母親の脆弱性領域だけでなく、これまでの研究では見落とされていたASD児の母親の効果的な関わり方にも焦点を当てた。障害のある子どもの親の中には、子どもの発するわずかな情緒的な信号を読むことができ、適切に反応する者もいる。親が障害のある子どもと高いEAを行うためには、子どもと肯定的な情緒的繋がりを喚起し、創造するための多くの効果的な方略を身につけている可能性が高い。本研究の結果より、ASD児の母親は、やり取りの中で、子どもがわずかに見せる自律的なリードや探索する場面を大切にし、妨げないようにかかわっている可能性が示唆された。このような視点で親子の情緒的な特徴を明らかにすることは、ASD児のみならず、障害を持つ子どもと母親の相互作用に介入する際のヒントになると思われるため、引き続きデータを蓄積し、療育現場でのアセスメントや効果検証としての知見を提供していきたい。

#### 5. 社会に対するメッセージ

私自身、現在2人の幼児の母親として、育児に奮闘する毎日です。その中でふとした瞬間に、子どもと私のやりとりをEAの枠組みで捉えることがあります。そして、あらためて相互作用とはいずれか一方の働きかけで成立するものではなく相補的であると感じております。また、私が肯定的な情緒を伴って働きかけると、子ども達はとても嬉しそうな笑顔で反応し、これこそが育児の報酬であると実感しております。一方で、障害やその他様々な要因から、子どもの情緒応答性が妨げられ、報酬が少ない場合、育児とはなんと大変でしんどいものかとも思います。しかし、今回のご支援をいただき、母子のやりとりを観察させていただいた療育の現場では、多くの母親達は子どもと情緒的にポジティブなやり取りを行っており、あらためて強みに注目することの大切さを実感することができました。引き続き、ポジティブな母子の情緒的相互作用を構築するための効果的な方略について追及していきたいと思っております。